

紹介

彦根市史 上册

彦根は関ヶ原の戦功によつて佐和山に封ぜられた井伊直政の没後、慶長七年嗣子直継によつて造営せられた城下町で、創建（移築）当初の天主閣以下諸櫓并に濠を今に存し、旧城下の町割や景観も比較的よく残っている。その名を国史の上に不朽にしているのは幕末に大老直弼を出したことを第一としなければならぬが、昨年その百年忌にして、同時に日米修交百年の記念すべき年に当り、かねがね編纂が進められていた市史の上册が刊行せられた。中村直勝・江頭恒治両博士監修のもとに末松修氏下数人の委員の分担執筆になるもので、自然環境篇を冒頭に、上代から中世を経て、近世初期築城と城下町の形成ならびに初期藩政の概要にまで及んでいる。中冊に近世の経済と幕末維新時代を、下冊に近代と現代、ならびに別篇社寺・文芸・民俗・災害等の諸章を収載する予定という。両博士はこの種の企画にあらがちなたんに名のみの監修とは異つて、みずからその何章かを執筆され

ているだけでなく、とくに全体の叙述を読者の親しみやすいものとして、その間におのずから歴史の意義をよく市民に知らせるよう留意されているように見える。その意味は、近來各地で企てられている地方史にしばしば見られるように、それがいわゆる中央の専門歴史家の手にゆだねられる場合、ややもすると今日の学界の専門的興味にのみ訴える学術論文の如きものとなつて、一般読者には理解し難く、またそれがその地方本位のいわゆる郷土史家の手になる場合には、逆にその関心があまりに狭く、その地方の事実が全体として今日何の意義があるかについての反省が欠けていることが多いが、本市史はその点について監修者并に各委員の配慮がよく各章節の末に及んでいる点をいうのである。

内容の中、とくに興味あるトピックを拾えば、その本命である築城ならびに城下経営の顛末を別として、古代にあつては東大寺領覇流村と条里制の問題、彦根寺の繁栄、松原倉があり、中世においては俊乗房重源の勧進、多賀神宮の活動、近江商人の若狭通商等の問題がある。

引きつづき、中、下両冊の編纂、刊行の順

調に進行することを期待する。（A5判六二頁・彦根市役所発行）（柴田 実）

本宮町公民館郷土部編

本宮町地方文化史図説

近年全国各地で、行政区域の統合に伴い、市町村史誌の編纂が活潑に行われ、幾多の成果が得られたことはいうをまたない。特に戦前のそれと比較し、戦後は地方史研究の進展と相俟つて、専門家との協力体制の上に科学的方法に基く学問的な著述がなされていることは、著しい特色とすべきであらう。しかし、ひるがえつてこれら市町村史誌が、なによりもまずそこに住む人々のためのものでなければならぬことを思う時、果して幾人がこれらの部厚い史誌に目を通すであらうかと疑いなきを得ない。このような杞憂を見事に打破したものが本書である。

本書の特色は、何よりもまず「図説」とある如く、写真を中心に、誰にでも親しみやすく編纂されていることである。私は寡聞にして、未だこのような企画が地方市町村史に採用された例を知らない。その構成は、自然の

歴史(地質構造)から始まり、太古・古代・中世・近世以降明治まで、更に民間芸能・名勝・天然記念物の諸項目からなっている。太古の項目は、考古学資料を中心に縄文から古墳時代までを扱い、古代・中世では、安達郷に関する万葉以下の歌を集め、又神社・寺院関係・蝦夷・長者伝説などを適宜配列して、この種の企画としては史料にとほしく困難なところを巧みにカバーしており、編者の苦心の程がうかがえる。近世以降は史料も豊富で且充実している。寛延二年この地方に起つた一揆(積達騒動)や、山論・あるいは、この地方出身の国学者・俳人・画家の紹介など、地方文書・色紙・絵画などを巧みに配して、みる者の興味をそそる。又「災害の歴史」として、阿武隈川・安達太良川との闘いの歴史、或いは、飢饉・火山の噴火など、子から孫へと語りつがれ、町民にとつては忘れることのできないいくつかの事件が、古記録・写真によつて生き生きとその闘いのあとを表現している。尚巻頭に、地質構造図、遺蹟分布布図、巻末には詳細な年表が付され、全体的な理解を助けている。

以上、本書の内容を簡単に紹介したが、勿

論みるものにとつては、いくつかの注文はあろう。例えば、二・三の用語の問題や、又は解説がもう少しやさしい表現をつた方がよかつたのではなからうかとか、或いは、写真と解説とを「左上」「下左右」とかで結ばず番号で表示した方がよかつたであらうとか、古代・中世などには、簡単な概観がつけれたら、等々と。しかしそれも所詮コロンブスの卵である。私は本書の紹介の筆をとりつつ、しばしば、祖父が本書の一隅を指しつつ孫に語りつたえをきかせ、又孫が祖母に解説を読み聞かせている姿を想像した。本書は若者のロマンティズムを呼びさまし、祖父母に歴史を説くものであると思う。我々は市町村史の一つのあり方をここにみるこがでできるのではなからうか。本書に引きつづき本宮地方史の編纂準備中という、御健闘を祈りつつ筆をおく。

(福島県安達郡本宮町公民館郷土部編 B5
版 六九頁 年表七頁 昭和三五年九月 本
宮町公民館発行 非売品) (原秀三郎)

藤田至善編

後漢書語彙集成 上

後漢書の完全な索引が出版されることは、我々が久しく渴望していたところであつた。それがこのような見事な形で、その上冊の出現をみたことについては、何よりもまず編者藤田至善氏の長年にわたる御苦労に対して、深い感謝の意を表したいと思う。またこの出版を強力に推進し、応援された森鹿三・日比野丈夫・堀井一雄・木田道太郎・米田賢次郎・その他多くの方々の御努力に対しても感謝の気持ちを抑えることができない。このような古典の索引を勞せずして与えられた我々は幸福である。それだけに索引を作られた方々の献身的な努力に対して、我々は何もつとめと敬意と感謝を捧げねばならないと思う。

周知のように、後漢書の索引には、すでに一九四九年、ハーバード・燕京学社が出版した「後漢書及注釈綜合引得」がある。それは我々に大きな便宜を与えたのであるが、収録された語彙が人名・地名・官名・書名などを主としていたため、社会・経済・學術・宗教